記憶のある裡に――大正時代のある子供の生活

安溪　芙美子

一、二才三ヶ月の記憶

人は一体幾才位からの記憶を持つのだろうか。それは勿論人によるのは当然だろうが、記憶の有る無しは思い出す事の多少によるように、私には思えてならない。

満一才の位からの記憶を持つ人、或いは六、七才以前の事は全く記憶にない人も、勿論いるはずだとずっと思い続けている。ところで私は大正八年七月生まれの老人だが、二才三ヶ月の記憶が鮮明に残っている。

その部屋はかなり広く真ん中の布団の中に黒い口髭を持つ男の人が、胸の辺りにしっかり両手を組み目を閉じたまま眠っている。周りには白衣をつけ大きな眼鏡をかけた男の人と白い服の女性の一人は瓶をささげ持ち、もう一人は寝ている男の人の胸に手を当てている。周りに三、四人いる女の人は母、姉、叔母、であるのは私にも分かっていた。ただ不思議なのは、三人とも大粒の涙を流しては拭き、またポロポロと涙が流れ

ているのを、私は何とはなく変な気がした。この見知らぬ髭の小父チャマはどうして目を開けないのかなあ、何時も私をだっこしてくれる姉や、“オバチャマ”となついている人も、お母さんまで泣いているのが、私には不思議でしかたがない。

“お姉さん、赤ちゃんの言葉をきいて”叔母は涙いっぱいの目で私を睨むようにみつめる。姉が黒髪の小父さんに縋りつき、何か言って泣くのを母親まで大粒の涙を流すのを、私はただ黙って突っ立ったまま、一人喋りをした。「モアカン、モアカン」と言ったのだそうだ。未だ言葉を話し切れない私の、唯一の言葉が「モアカン」だったのだということは十才を過ぎてから母から聞かされて、私は申し訳ない思いで泣いた。黒髪の男の人は実は父親で臨終の間際だった、との事だった。

私をだっこして守りをしてくれた叔母は父の末の妹だということは、後年小学校に入学した折聞かされて、子供心にも何故“もうあかん”なんて言ったのだろうとかなりの間苦にしていたように思う。「モアカン」と言う赤ん坊の言葉は、大人にとっては「もうあかん、もういけない、もう駄目だ」でありつまり死を意味する言葉である。私は極小さい頃に、多分十ヶ月位で歩きはじめ、同時に訳の分からぬ言葉を呟きモアカンもその言葉の一つであったらしい。ただし死に臨んでいる人の回りをもう

アカンといい、やたら歩く事は、そこにいるものたちには病人がもういけない、もうあかんと言うわけで死を意味すると、思うのは当然だった。立派な口髭をピンと跳ね上げた眠り続ける人が、良くだっこしてくれた父だと理解するには私は幼すぎ、何時も喋り続けているアカチャとかモアカンとかブベベ等の無意味語の仲間のモアカンを、父の臨終を取り巻く母や叔母兄姉や女中達にとっては、父の最後を意味するのは当然だった。私は女中の一人に抱き抱えられ泣きわめいて隣の部屋に、寝かされワーワー泣きわめいた。との事だが勿論記憶にはない。それが私の唯一の父に関する記憶である。多分その後たくさんの人たちの葬式や軍人であった父の所属していた、十六師団の部隊の兵や上官達の訪問とか親戚縁者の葬儀の参加など、人で一杯の我が家の記憶は私には全くない。後年五才年上の兄が、墨で髭を書き“僕は部隊長でお前よりずっと偉いんだよ”とよく威張ったが“じゃ、私も部隊長になる”と言ってみると兄はちょっと小馬鹿にした笑顔になって“お前は女の子だ。兵士にはなれないよ”というのに腹立ち、私だってきっと兵隊さんになるもんと心に決めていたが、すると目をしっかり閉じた父親のピンと跳ね上がる黒髭が見えたように思い、多分抱かれた時その髭をひっぱった記憶が蘇るのだろう。“お父さん”と呼んでしまう。

兄は哀れむような表情になり、“馬鹿ダナー、もうとっくにお墓の中で骨だけしかないよ、これからは僕がお前のお父さんの代わりになるんだよ”と墨で髭を描き、“どうだ、お父さんみたいだろ”と威張ってみせる。

「大分違うけど、まあいいよ、おにいちゃんのお父さんで我慢する」

「そうか、お前は聞き分けのいい偉い子だよ」誉められると何となく偉くなったような気がして、“お兄チャン大好き”なんてお世辞の一つも言ってしまう他愛なさ。そんな幾日か幾年かが過ぎ我が家にも少し変化が起こる。それは母方の祖母が、娘の家の心許せなさ、小学六年生を頭に小学三年生、四才の幼児のいる家庭の監督に来てくれた事だった。ある日庭の松の枝に腰掛けていた兄がスルスルスイと来ると、陣取り遊びをしていた私の傍らに近づくと、うなずくような声で私にいった。

「芙子、お前知らないんだろ、今日からお祖母さまが家の人になるんだよ」

「お祖母さまって誰？」

「お祖母さまってのはお母さんのお母さん、そしてこの人偉いんだヨ、武道の達人だってサ」

「武道の達人？って何をする人？」

「馬鹿ダナーお前、ま、学校にも行かぬ年のお前にわからなくて当た

り前だけど、武道ってのはね、僕が僕の友達と竹の棒でよくチャンバラゴッコやってるだろ、君だって時々仲間に入ってお母さんに叱られるあれだよ」
「ふーん、でもタッジンって、お祖母さまのお名前なの」
「馬鹿ダナー、お祖母さまをお前は知らないだろが毛利家の侍の娘で、小さい頃に剣道を十分に習められたって、お母さんに聞いたよ」
「？？？侍の娘って何する人？」
「お前に言ってもわからないだろが、誰よりも強い人の事さ」
「強い人って怖い人の事？」
「そしたらもう泥棒やら来ても怖くないの？」
「ウン、お祖母さまは女でも剣道の達人だってお母さんいわれたから、もう泥棒も押売も家に入らないよ」
「だったらお兄チャンも用心棒しなくてもいいの」
「ああ、泥棒入っても心配ないし、すると多吉も自分の家に帰れるよ」
多吉というのは、女子供ばかりの家を案じて、祖母の寄越した出入りの八百屋の丁稚さんで、まだ十代の男の子で、兄や姉の送り迎えや母の使い走りや、私のお話し相手もしてくれる、私には優しいお兄チャンの一人だった。

「多吉チャン家に帰ってしまうの芙チャンいやだあ、お婆さまより多吉ちゃんの方がいい」
「馬鹿ダナー、この間お母さんが押売りに攻められて難儀したこと忘れたのか？多吉チャンお廻りさん呼んでくれただけじゃないか」
「でもお婆さまって、多吉チャンみたいに私をオンブして下さる？」
「そりゃまあ無理だけど、押売りだとか泥棒が入っても、お婆さまは毛利の殿様に支えてた家老の娘で、剣道の達人だよ」
「達人っても、私にわからないもん！」
「ともかく、年を取っていても泥棒でも強盗でも武道とか柔術、剣道とかできる偉いお婆さまだから心配いらないんだよ」
でも私にはどうもこの兄の云うことを、芯から信用を出来ないでいる。兄にはおやつを巻き上げられたり、玩具を壊されたりすることもあるので、どうも信用できないでいる。兄は余り信用できないとしても、十才も年上の姉なら、きっと本当の事を教えてくれるだろう。
「お姉さん、もうじきお婆さまがお出でになるってお兄ちゃん云うけど、そのお婆さまって、剣道が出来てお兄ちゃんなんか、絶対勝てないって本当なの？」
姉はしばらく考える風に、頬杖ついていたが思い出したように、

「そうね、剣道の事は知らないけど武道っていってね、芙チャンにはまだわからないでしょうが、とても強い力で泥棒の腕ナンカすぐにねじ上げて、降参させられるんですってよ」
「お姉さん見たことあるの？」
「見ていないけどお母さんがそう仰るのだからあなたも安心しなさい、お母さんは嘘おっしゃらないでしょ」
姉にそう云われると何と無く納得できて、一日も早くそのお婆さまがお出になればいいと思った。
翌日の昼頃お婆さまは、少し年寄ったお爺さんを供にして我家に来られた。
「そなたが末っ子のフーサンかい？」
「私フーチャンって名前です」
「おお、そうかいの、幾つにお成りかね」
「きっと五つか六つくらいです」
「そうかいの、自分の年位はもっとしっかり覚えるものじゃ、秀子はいったい何をしているのじゃ」
「？？？」
いくらか叱責気味に聞こえる祖母の語調は私には少し恐ろしく感じ

られた。
「母上様、ようこそお越し下さいました。有難うございます」
何時の間にか私の後に立つ母の声に振り向いた私は、何がなし緊張しているような母の顔を仰ぎ見て思わず“こわい”と着物の裾に縋りついた。
「この子は人見知りをするようじゃの、良い習慣ではないのう」
「多吉に暇をだしてから、この子は遊んでくれる者がないもので、つい失礼致しました。ふうちゃん、お婆さまですよ。いい子ですネ、こんにちはの御挨拶しなさい」
「ハイ、お婆さまこんにちは」
「こんにちは、だけではいけんのじゃ、自分の名前を先に云い、それからお婆さまようこそお越しなされませ、とこういうのじゃ、おわかりか」
間髪を許さないいくらか叱責の響きのある祖母の言葉にビクッとした私は、昨夜姉に幾度も教えられた言葉を思い出し座り直して両手をつき、改めて挨拶をいう。
「お祖母さま、遠い処をようこそお出で下さいまして、有難うございます。私は末娘の芙美子でございます。これから色々お行儀の事教えて下さいませ」
「おお立派に挨拶できたのう、秀子さん。この娘は父を亡くしても私

の思うた程、しお垂れもせず元気そうでそなたも苦労じゃったのう、これからは私も子供の成長に手を貸す程にしっかりなされよ」
母はうっすらと涙を浮かべ祖母を見上げ
「母上様、何卒これからいくへにもお導き下さい」
と言いながらも一生懸命涙が零れないようにしていた。
何となく祖母を見上げ母に目を移すと、母の頬に二筋の涙の後が見え私は思わず、この余り見知らぬ祖母さまの強い目に射すくめられ、思わず
「お祖母さま、お母さんを苛めないで」
「おおそうかいのう、そなたは母を大事にする子じゃの、それはよい子の証拠じゃ」
祖母はそういうと私の頭を軽く撫でた。私は何となくうれしくて、昨夜姉に幾度も教わった言葉を思い出しながら、二度目の挨拶を述べる。
「お婆さま今は姉も兄も学校に行っていますので、末っ子の私がお祖母さまのお手伝いします。何でもお言い付け下さい」
するとニコリともしなかった祖母の表情が緩み
「おおそなたが手伝っておくれかい、それでは手水の盃に水を汲んでおくれなされ」

子供なりに先は第一関門をやり過ごしたような安堵感にホッとして、イソイソとポンプを動かし水を運んで母を見上げ一寸微笑んでみる。母は私に小さなお盆に載る茶託をわたしながら
「零さないようにお婆さまのお傍に持っていってちょうだいね」
「ハイ」
返事はしたものの、どこに持っていけばいいのか私にはわからない。お婆さまは白い幕の垂れ下がる仏壇の前に座り、併せた両手には二重にも三重にも見える数珠を揉み上げるように擦っておられる。
「お婆さま芙チャンお水を持ってきたの、何処へ置くの？」
「おおそうかい零さぬよう縁側の端にソロリと置きなされや」
私は言われたようにソロリと降ろした心算だが、何しろかなり大量の水が入っているので、ソロリのつもりがバシャンとなり金盥はひっくり返り水は廊下に零れ、大半は縁の外へ流れてしまった。
祖母は振り返りざま立ち上がり
「だから言わぬ事じゃない、子供に持たせるなんて論外じゃ」
「お婆さま御免なさい」
私は素早く祖母の前に座り両手をつき頭を下げて謝る。
「そなたは悪うはない、お光を呼んで来なされ」

「はい」
私は言われるまま台所にいた女中のお光を呼ぶ。
「お婆さまがお光を呼べと仰ったよ」
滅多に使わない仰ったなどと難しい言葉がうまく口から出て少し得意である。というのはその時家にいた二人の女中さん、お光のお婆あとお兼婆あが二人とも
「嬢さん(その頃京都では女の子を嬢さんと呼んでいた)どうおしやした、お婆様にチャンと金盥お運びしたんでっしゃろ」
「ウン、芙チャン置く時ガチャンと水零したの、そしたらお光を呼んできなされって言われた」
「へエさいどすか、そらえらいこってすな、そやけど嬢さんの故やオヘン、お光が持って行ったらよろしうおしたのになあ、そんでお叱られやしたんどすか」
「芙チャンには叱られたかどうかわからへん、でもお光を呼びなされっていわれて芙チャンこわかった」
「そうどすか、そらびっくりおしやしたろな、もう大事おへん、外に遊びにおいでやすお光があんじょうしますよって、嬢さんもう庭で遊んでおいでやす」

私は勿論とんとして庭へ出て、何処かの木の上に兄がいる筈なので探すことにする。それにしてもあのお婆さまってこわいなと思う。お兼のお婆のいう通り本当にお母さんのお母さんなのかしら？何でも教えてくれる兄に早く本当のこと聞きたい。私は草履を履き兄の居りそうな椋の樹の上を見上げる。案の定兄はかなり高い枝に跨がり、木の実を口に放り込んでいる。
「お兄ちゃん、私も上に行きたい」
「よっしゃ、今迎えに行くゾ」
兄はスルスルと降りてくると私の下に廻り手早くお尻を持ち上げてこの枝その枝と私の持つ枝を指示しながら、押上げてくれるので瞬く間に私も樹上の人となりうれしくてたまらない。
「ね、お兄ちゃん、お婆さまって怖い人なの」
「大したことないや、此処にいればいくらお婆さまだって登れないから安心だよう。お前手が届かんから実は取るなよ、兄チャンが取って渡してやるから一寸まっておれ」
「ウン」
兄はスルスル駆け登り瞬く間に手に一杯の実を採って私のエプロンのポケットに入れてくれる艶やかに柔らかく甘い椋の実を頬張り何となく

何時もの日に帰ったような一種の安らぎを感じた。
「ね、お兄チャン、お婆さまは何時まで此処にお泊りなの」
兄は少し考えていたが暫くするとニコッと微笑み
「きっと十日ほどだろう、十日程っていうのはね芙子、お前が十辺ほど寝れば過ぎるンだよ」
「そしたらすぐだネお兄チャン」
「そうダナー、芙子は昼寝するから大分長い間だろ」
私は毎日一度や二度はお光のお婆ぁのお嘶を聞いていると眠ってしまう習慣があるのでその間に帰られるかもしれないと思うと、もっといて欲しいような気がする。
「薫、薫や、そのような高い所へ妹を上げて、落ちては怪我するからもう降りなされ、そなたは年も上、男の子でもあるのじゃから木登りは平気でも、芙子はまだ五才余りの女の子じゃ、危ないからもう降りてきなされ」
私はビクッとして兄を見上げる。
「お兄ちゃン降りなされってお祖母さまが言われたよ」
「わかってる、すぐ降りるからお前はそこ動くなよ、じっとしておれよ」
「だってえ、お祖母様の言われることはちゃんと守らないといけないっ

て、お光のお婆ぁがいうたでしょ」
「わかってる、だけど余り気にするな、僕は木登りの達人だ、落ちたりするものか。お前はそこから兄チャンが教えたとおり出っ張りに足掛けて下に降りろ、そして暫く下でまっていろ、兄チャンが一杯実を取って持っていってやるからな」
「ウン」
私は素直にソロソロと出っ張りを指先で探しながら下へ降りる。縁側の日の当る処に母と祖母が並んで座りながらお兼婆の給仕でお茶を飲んでいるのを見下げ、お婆さまの横顔が母とよく似ているのでびっくりする。
「お母さんとお婆さま同じ顔に見える」
「馬鹿お言いでない、親子じゃから似るのは当たり前、六才にもなってそのような愚なことを言いなさるな」
「だってえ」
「オーイ兄チャン篭降ろすからな君は小さくて重くて持てないからお光とお兼婆を呼んでお出で」
「そうさ、二つの篭に一杯あるんだ」
私は何とも面白くなって台所にいた二人のお婆を大声で呼ぶ。

「お光とお兼のお婆早く来て、お兄チャン椋の実篭に二杯も採ったので降ろすから手伝いしてってよ」
「へーエ、そりゃ偉いこってすナ、落ちたら怪我するさかいすぐ行きまっせ、二人のお婆は大篭を持って木の下にやってきた。
「僕二つとも縄でつるすから二人でうまく受け止めて」
「へエー、そやけど坊っちゃん一つずつゆっくり降ろしてくれやっしゃ」
「解ってるって婆さんよう、うまく受け取れよ」
「へエー大事オヘン、あんじょう取りまっせ」
母も祖母もいったい何事かという風に、奥の仏壇の間から出てきて、木を見上げる。
「薫は何時もあのような危ない樹上りをするのかい」
祖母が聞くと
「いつも嬢さん連れておあがりでっせ」
と、お兼婆がいらぬことをいう。
祖母は母を振返り
「枝が折れれば大騒動ぢゃ。秀子さんしっかり監督せにゃ大怪我の元になりますよ」
そんな祖母の話は私は何だかおかしい。

「だってお兄ちゃんは、お友達四・五人と時には私も連れてこの東福寺の本堂の屋根の上でしょう。鬼ごっこしてるんだもん」
「秀子さん、芙美子はこんなこと言ってるが、貴方は知らぬのかえ」
「まあ私は小学校にお勤めしていますもの、静馬さんが亡くなってから給料も入らないし、少佐っていっても遺族遺金というか扶助料というもんですか少ないものですから、お勤めでもしなくちゃ、女中もいることだし大変なの、あき子も暫くで女学校に入れなければなりませんから」
「そうだネ、女子の細腕では何かとやり繰りは大変じゃ、ババも多少のものは持っておるが病気でもすれば幾何かのものも必要じゃしするから何とかやり繰りすればやっていけようというものじゃ、秀子（母の名）そなた二人も女中はいらん、私が来たからには一人帰しなされ、そうじゃお光よりお兼の方がよう働くようじゃから、お光はまだ若過ぎる、早速にも家に帰しなされよ」
「はい母上様がそうお思いならそのように致します」
子供心にも二人の話す意味はすぐ理解でき、今度は若いお光が多吉のように家に帰されると思うと、悲しくなって思わず泣いた。
「芙美子さんや、そなた何故泣くのじゃ、お光は帰しても我々がいるから心配はいらぬのじゃ、お光は若すぎて余り役立たぬ、五才にもなれ

ばそのくらいはわからねばいけん、侍の子はそのくらいのことで泣いてはいけんのじゃ、私の傍においでなされ」
私は母を見上げどうしようかと戸惑う。
「お婆さまに逆らうことはなりません。さ、傍に行きなさい」
母に促され私はしぶしぶ祖母の傍に寄る。
「そなたは父親に死なれても余り泣きもせず聞き分けのよい気丈な子じゃ、これからは婆々様がそなたに武道を少し教え姉に優る子供に育てよう」
頭を撫でる祖母の手の暖かさで何となく気がほぐれたのだろう。私は暖かい祖母の手を両手で挟みお婆様を見上げ笑顔になった。
「お、そなたは人見知りをせぬ良い子じゃ、これからは婆々様と寝ようぞ、おわかりか」
「ハイ、今日からお婆様の傍で寝ます。お婆様芙チャンにお話しして下さい」
「よしよし、お話はいくらもしてとらせよう。だが自分のことをチャンづけでいうてはならぬぞ、目上にものをいう時はもっとへりくだって、私といわねばならぬ、おわかりか」
「ハイ、わかりました」

「よしよし、秀子やこの子は存外聞き分けがよい、もっとお転婆かと思うたが存外じゃ」
私は自分が誉められているのは解ったが、祖母の言葉遣いが普通の女の人と違って、何かしら大人の男の人が遣う言葉のように思えて、不思議だった。
祖母が立ち去ったあと、母に祖母の言葉遣いに就いて尋ねてみたが、その訳はよく分かった。
「祖母は毛利藩の侍の娘で幼い時から上にも下にも男兄弟が居て、その為の武家の習慣として剣道とか武道を幼い頃から習い、祖母はどの兄弟よりも熱心に習い“この子が男ならどれほど安心か分からぬ”と嘆かせたとのことで、そのせいで今でも普通の男より強いのだから家みたいに女子供ばかりの家が気になって来て下さったの」
私の頭を撫でながらの母の言葉に私はすっかり満足して、何かしら気分がホッとするのだった。というのは丁度その頃あちこちの家に良く泥棒が入り、子供心に夜が不安だったせいである。
「ね、お母さん、もし泥棒が家に来てもお祖母様がいらっしゃれば大丈夫なの」
「そうですよ、どんな男が入って来ても一度お婆様に掴まると身動き

できなくなるから、芙チャン、今日からもう心配しないでお祖母様の傍で休みなさいよ」
母にそういわれると子供心に感じていた一種の不安がすーっと消えるのを覚える。
私は何となく嬉しくなって、まだ椋の樹上にいる兄に母から聞いたことが伝えたくなり、祖母と母に一礼して外へ出た。
「おい芙公、何喜んでニコニコしてる」
「ね、お兄ちゃんもう降りてきて、いいこと教えて上げるよ」
「フンお前のいいことって、陣取り遊びだろ」
「違うよ、もっとずっといいこと、お兄チャンびっくりするいいこと、私うれしくって、今日は一杯眠るんだからあ」
「ふん、寝ながら団子でも喰ったか、馬鹿な子じゃ」
「違うってばあ、お兄ちゃんもお姉さんも腰抜かしてひっくり返る、いいお話お母さんに聞いちゃったんだもん、教えてほしくないの」
「お前の話なんてしれてらあ、せいぜいお母さんに浦島太郎のお話でも聞いたんだろ、そんなことなら俺の方が山程知ってるよ」
「違うってばあ、もっともっと凄いこと、でももう教えて上げないよう、お姉さんだけに教えて上げるもーん」

「そうかい、勝手にしろ、姉さんなんて未だ未だ帰ってこないようだ、口惜しけりゃもう一度登ってこい」
「いや、お婆様が六つの女の子は木登りするのはイケンって仰ったからもう登らないようだ」
「勝手にしろチンピラ、あ、面白いもの見つけたぁ」
兄は私の気を引くように大枝の股に腰を降ろし手を翳して何かを見ている。それが私を引きつける兄の常套手段なのはとっくに承知している私は樹から離れて、又お婆様の傍に行く。
「薫はまだ木の上かい」
「はい」
「あのこは勉強しないのかね」
「夜お姉さんに教えてもらっているようです」
「そうかい、お姉さんは女学校で忙しいのに」
「お姉さんネ、とっても絵がお上手なので今皇后陛下にケンジョウする絵を描いていらっしゃるって、お光のお婆ぁが言ってました」
「そうかい、あれも絵が巧いのかね、秀子さん、つまりそなたの母親のことだがね、あれも昔から絵がうまかったのだよ、六条から府立第一高女へ通っている時も、毎日絵を描くのに追われて遅く帰ったものじゃ」

こういう話になると私には余り解らない。それよりお祖母様は一体何処からお出でになった人か、そして毎日何をしてこられたのか誰も教えてくれないのが子供心に何となくすっきりしない。自分で尋ねてみたいのだが

「いらざることを聞くものでない」

と、母に叱られそうで黙っていた。その内お兄チャンが教えてくれるだろう。

祖母持参のお菓子を貰って口にすると今まで味わったことのない不思議な少しねばっこいお菓子。

「芙美子さんや、そうムチャムチャと頬張って食べるのは品が悪い、口を閉じゆっくり噛んで召しなされ」

早速祖母に注意され、「ハイ」と返事しながら祖母を見上げる。祖母は一枚のお菓子を小さく千切り一ひらずつ丁寧に口の中に入れ、音もさせず、静かにお茶と共に飲み込まれるようで、私はただぼんやり見上げるばかりである。

「芙さんや、このお菓子はのう、松風というて御殿の方々のお召しになるお菓子じゃぞよ」

私は返事もせず、なんとなく歯の裏に粘りつくような味わいを鬱陶し

く思い傍のお茶で流し込むと、

「お婆様御馳走様、芙チャンお兄ちゃん探してくる」といった。

「そうかい、薫は木から降りて何処へ行ったのかね」

「解りません、でもきっと紅葉谷でお魚釣りと思うけど、」

「あれは勉強もせず木登りやら魚釣りなどにうつつを抜かしてて、頼りない惣領じゃの」

「母上様、あのこは父親が亡くなってから学校へも余り行きたがらず一日中木登り・川遊び時には倉から色々持ち出して、皆川へ捨ててくるので、お光もお兼も捜し物に難儀しております。母上様少し折檻してくださいな」

「左様か、もうそなたの手に合わぬようになりましたか」

「はいどうしようもなく困り果てております」

「お前さんの手に合わぬのじゃな、よろしい、婆々が言うて聞かせよう、反抗しても私には勝てぬのじゃ、案じ召されるな」

「はい、母上様にお任せすれば学校へ行くやもしれませぬ。お願い申し上げます」

祖母は返事もせず手にした煙管を勢い良く吐月峰に叩きつけられた。私は何となく兄の身の上が不安になった。

母や祖母の前から立ち上がり、兄が何処行ったか庭伝いに谷へ降り“お兄ちゃん”と大声で呼ぶ。
兄はかなり奥深い川上でパンツ一枚になって川の中を右往左往していた。
「お兄チャン、お兄チャン魚取れたの」
と、呼びかける。
「あ、そのバケツ覗いて見いよ、四匹も泳いでるよ」
私は何となく嬉しくなってバケツを覗く、本当だ、大きなのが二匹、小さいのが二匹、皆元気よく泳いでいる。
「お兄ちゃん、沢山捕ったね、でも逃がすのでしょ」
「馬鹿云え、焼いてお祖母さまにあげるよ」
「いやだあ、お魚さんかわいそうだよう」
私はもう泣声、何時も逃がしてやる兄が今日に限って、どうして焼くなんていうのかわからない。
「せっかく泳いでるのに焼いちゃ可哀想だよう、お兄ちゃん逃がしてやって」
「駄目だ、ほらもう二匹捕まえた。オイ芙美公バケツ持って来い」
私はバケツを掴むと持ち上げ、水無川の流れに全部流した。

「こらチビ、何するんじゃ」
兄は小川から飛び出すと私を、思い切り川へ突き飛ばす。私は前後不覚の怒りのため、耳も張り裂ける程の大声で泣き喚いた。
“うるさい泣くな”兄も大声で喚く。
“嫌だー、お魚さん焼くのいやだ、せっかく泳いでたのにお兄ちゃんに掴まるのも可哀想なのに焼いて食べられたら、お魚さん死んじゃうよう、イヤダー、イヤダー”
こうして一旦泣き喚くと、甲高い私の声は響き渡ってしまうのだった。
見るうちに僧堂のお坊さんが四、五人バラバラと川のほとりに降りてくる。
「こら小僧、ここで魚捕るなといつもいってるだろ」
「捕っても逃がしてやるからいいのん違うの」
「そんじゃ何故妹が泣いてるのだ」
「そんなこと知るかい、此奴は何時も泣くんだよう」
「うそだ、和尚さん、お兄ちゃん、いつもお兄ちゃんお魚さん逃がすのに今日は焼いてお祖母さまに上げるっていったの、だから芙チャンお魚さん逃がして上げた、そしたらお兄チャン怒ったから芙チャン泣いたの」
「そうかそうか、そりゃお兄チャンが悪いぞ、この谷の魚は全部仏さま

の生代りだよ、小僧、お前ただ取って面白がってるだけで、いつも逃がしてたやないか」
「婆々様だって、そんな人お前等の家に居ったことないゾ、坊さん騙すと地獄へ真っ逆様に落ちて鬼に喰われんだぞう」
「和尚さん知らんだけや、今日はうちに日本で一番強いお婆様が来てんだぞ」
「何、婆々様か、あの老師様の知り合いのあの婆々様か、それにしてもこの通天橋の魚は絶対誰も食うことならんのだ、さあ、小僧解ったか、チビのいう方が正しいんだ、帰れ、そのバケツ持って上へいけ」
屈強の僧堂の坊さんに追い立てられやんちゃ盛りの兄もスゴスゴとバケツを抱え上へ登り始める。
「芙チャン、君のおかげでお魚さん命拾いしたネ、さ、和尚さんだっこして上へつれてあげよう」
私は何となくうれしくて、暖かい坊さんの胸に抱かれて上へ登った。
「ありがとうお兄ちゃんの坊さん」
「うん、芙ちゃんはええ子だよ、元気だせよ」
小僧の和尚さんは、橋に登ると何度も頭を撫でて僧堂の裏門に消えていった。私は何となくその和尚さんがお父さんみたいなのだと納得して

ほっとしながら、母の待つ龍吟庵へ戻った。
兄は祖母の前に膝を揃えて座り丁寧に頭を下げ
「遠い所をお越しになり、僕今日はお祖母様にお魚焼いて上げようと谷でお魚取ったのに、芙子と僧堂の坊主が捨ててしまいよった」
「そうかいせっかくの骨折りが無駄になり、そなたは口惜しかろう。然し私は川魚は好かぬから、もう殺生は止めなされ」
兄は憮然とした表情で、いきなり祖母の前にある祖母のいう“松風”と名付けられたお菓子を鷲掴みに四、五枚取ると縁側から飛び降りると
「秀坊ンチへ行って来るう」
と駆出してしまった。
「行儀の悪い小僧じゃ芙さんや、真似するでないよ」
「はい」
私は素直に云って、兄が云う秀坊ンに会いたいなと思った。秀坊ンというのは東福寺からは少し遠い鳥羽街道の瓦屋の子供で兄の同級生で、何時も私に白雪姫とか赤頭巾とか珍しい外国のお話をしてくれる、兄よりも好きな男の子だった。芙ちゃん秀坊ンのお話聞きたいなと心底思ったが、お祖母様の少し厳しい表情を恐れ、ものもいわずおとなしく座っ

ていた。
お祖母様は少し退屈されたのか、小声で聞いたことのない歌を口ずさんでおられる。意味も節も全く解らないが、私は膝に両手を置き黙って祖母の歌に聞き入る。何となく淋しいような悲しい気がしたが、祖母は年に合わない底力のある声で眼を閉じ自分の歌に聞き入っているような雰囲気はそれなりに感じとれて、終わるまで私は身動きもしなかった。
「芙ちゃんや、そなたは婆々様の唄をよう聞いておくれだね、これは今様という日本の昔の唄で、昔はこの唄と共に男も女も舞をしたものだよ」
祖母は大らかな目になって、私にはなんとなく祖母が私のわからない何かを思い出しているように感じられた。何時の間にか母もお光やお兼のお婆も聞いていて、共々に手を叩いている。
「芙さんや、お前さんも母者に唄を習うたであろう、婆々様に一度唄っておくれなされよ」
「さいやさいや、あの御隠居様うちの嬢さんは母御からいろいろ歌を習われて上手に歌えて、それに合せて踊りも自分でお作りでっせ」
「そうかや自分でね、それは是非共、婆々様にも歌って踊っておくれなされよ。祖母にそういわれると気恥ずかしくもあり、でも歌わないと失礼になるような気もし、私は思わず後に座っている母を振り替り見

た。
「芙チャン、ほらこの間自分で振り付けたあのリンゴの歌を踊りと一緒にお婆様に見て頂きなさい」
母にそう云われると黙っていることが、この遠くからわざわざ出て来て下さった祖母に失礼なような気がして、恥ずかしさをこらえて歌って踊ることにする。
当時、母は毎晩私を寝かせる折り、決って“赤い鳥”という本を枕元に置き歌を教えてくれたりお話を聞かせてくれるのだった。
「お祖母様、そしたら“赤いお家の歌”と芙チャン自分で作った踊りと、一諸に踊ります」
「おおそうかえ、それは可愛らしいことじゃ」
祖母は優しい笑顔になって手を叩いて下さった。母もお光やお兼のお婆あも一緒になって手を叩いてくれる。私は生まれて始めて恥ずかしいという気分を味わいながら、胸がドキドキした。多分それが私の晴れがましいという経験の、最初であったのだろう。

♪赤いお家の窓閉めて　林檎愛しや冬篭り
銀のお盆に載せられて　誰が忘れた棚の隅

お盆の上があの野なら会うた小鳥も来るであろ
あの野で眺めた青空は二度と帰らぬ夢の国♪

「お婆様これで終い」
おおそうかえ、そなた上手に歌って踊っておくれだよ、可愛かったよ芙さんや。
怖いと思っていた祖母の思いがけない誉め言葉にうれしくなって、今度は姉に習った難しい女学生の唄を歌う。

♪夕空晴れて秋風吹き　月影落ちて鈴虫鳴く
思えば似たり故郷の空　ああ我が父母いかに在わす♪

♪イファボディミタボディ、カミングツルウザライ♪

とこれは姉の唄う英語の唄。
「そなたはなかなか利発な子じゃ、外国語も覚えて利発なことじゃ、サ、婆々様が褒美をとらせよう」
祖母は傍らの大きな袋の中から、紙で作った姉様人形を出して掌の上に載せて下さる。私は嬉しくて大きな声で母に見せる。

「お母さん、ホラ芙チャンお婆様にこんなきれいなお人形さん貰った」
母は手に取るとニッコリして祖母に伺い、
「母上様何時までも御器用で嬉しうございます」
「何の、小さい子が珍しがって喜ぶのが私の喜びというものじゃ」
台所の婆あ婆も皆手に取って、
「嬢さんきれいなお人形戴かれて嬉しおしたなぁ」
と喜んでくれるので、私は一層嬉しくなって思わず、
「お祖母様ありがとうございます」
と、いったことのない丁寧な言葉でお礼をいう。
祖母は優しい目になって私の頭を撫で
「そなたは利発な子じゃ、今日はババサマと一緒に寝ようぞ、面白い話もしてしんぜよう」
と、いわれ、私としてはやっぱりお母さんと寝たいのだけれど、それではせっかく寝ようといってくれた祖母に悪いと思い
「お婆様お話ししてネ」
と言ってみる。
「何のお話でもして進ぜよう」
「ヤーイ芙子ばかりチヤホヤされていいのう、僕だってお婆様と一緒に

寝るよう」
半分眠りかけていた兄が突然起きて
「お婆さん僕と寝ようよ」
と、傍に寄ってきた。
「馬鹿お言いでないぞよ薫、そなたはこの家でただ一人の男であろうが、盗人の忍び込む時もあろうぞ、玄関の間でしっかり張番するのが男の勤めであることを忘れるでないぞ」
「そんなこといっても僕まだ子供だよう」
「もう子供ではありはせん、四年生といえば立派に男としての勤めは出来るのじゃ、それをまあそなたは木登りや魚取りをして僧堂の和尚に叱られたというではないか、亡くなった父親の代りをせねばいけんのじゃ、おわかりかえ、もうそっと大人になりなされ」
「いやじゃ、僕まだ子供ダーイ、お父さんの代りなんて出来るはずないよう、僕婆々さん嫌いだーい、もう寝るわい」
兄はそういうと祖母に向かって赤ンベーをして奥の部屋へ消える。
「母上様、何卒お許しを、あの子は腕白で困ります」
「何、よいよい今に大人になるであろ、そなたも大変であろうが頑張りなされや」

何時の間にか婆や達も姉や母も部屋から消え私はお婆様と二人だけになり気が付くと布団の中だった。それからどれほどの時間がたったのだろう。私はオシッコがしたくなり目覚めた。枕元には灯心の燃えるあんどんの光で周囲が明るい、一人ではお便所に行けないので、何と無く目を開いて辺りをそれとなく見回す。
すると何か動いている。あんどんの光で見るともなく見ていると、影は見たことのない男の影である。私は恐ろしくなり、あれが泥棒という者ではないかと、とっさに思う。
「お婆様、お婆様泥棒がいる、芙チャンこわい、お婆様おきて頂戴」
私は思わず、大きな声になった。
「何じゃチビとババアか」
男は私の傍によると頬を撫でる。
「お婆様いやだあ、泥棒が撫でたよう！」
絶叫に近い子どもの声は一辺に家中を起こしたようだ。瞬く間に家中のあかりがつき母も姉も兄も私と祖母の部屋にやってきたが、
「ヤーイ、泥棒がお婆様の膝の下で泡吹いてるよう」
兄の大声におどろいて隣に寝ている筈の祖母をみると、祖母は泥棒を押さえつけ、

「秀子さん丈夫な紐を持ってきなされ、身動きできないよう縛りつけるほどに」
と、ニコニコ笑っている。泥棒は苦しそうに溝落ちを手で押さえながら、
「クソババアとガキだと思うたのに、なんちゅうこっちゃ」
と、思っている。
「タダのババと思うたがそちの失敗じゃ、ワシの武術で死ぬものを居るのぢゃ、ひと様のものを夜に盗もうとする悪党には当然の報いぢゃ、もう一発喰らわせてつかわそうか」
祖母が少し身動きすると、泥棒はペシャンコの姿になり、
「もう悪いことは致しまへん、へえ何卒堪忍しとくれやす、ワシ息も出来まへん、もう悪いことしまへん、へえ何卒堪忍しとくれやす」
子どもの私が見ても一寸可愛想な程泥棒は青い顔を畳にすりつけ、お腹を痛そうに押さえつけ、涙を流している。
「そなたごとき悪者には容赦せぬが婆々の武道じゃ、三人や五人が掛って来ようともびくともせぬのが毛利家の武道というものじゃ。まだ生かしてとらせただけ有難いと思わっしゃれ、婆々と子供と侮ったがそなたの地獄じゃ。痛かろう、二度とこのような悪さをするでないぞ、世の中にはまだまだ強い婆様が一杯おるぞよ」

「へえ、もう二度と悪さは致しまへん、けどこんな強い婆様におうたは初めてじゃ」
「馬鹿いうな、我等年寄りはそなたらと違い皆武道の心得があるのじゃ、性懲りものう悪さをすれば何れそなたの命はなくなるのじゃ、わかりたか」
「へえ、もう肝に命じてわかりました」
艶のある泥棒の額を祖母は二本の指でチョイと押したが、彼は「痛々々」と大声と共に涙をポロポロ零し、子供心にも一寸この泥棒が可愛想だった。
「オッチャン、お婆様の強いこと知らんかったの、お祖母様日本で一番強い人だったのに、そんなとこへ泥棒に来たから罰当ったんや」
「さいでおます。さいでござります。へえ」
と、ヘコヘコ頭を下げていると、姉たちが呼びに行ったお巡りさんが三人も来て、
「こら正公、又お前か、今度の懲役は長いぞ、ここの御隠居には一ころやろ、ざま見ろ世の中なめとるから罰じゃ」
正公といわれた泥棒は鼻水をすすりながら、
「へえ強い御隠居様、もう泥棒は懲り懲りです。今度出てきたらマト

モに働き御挨拶に参じますで伺います。へえ」
「まさ、お前その言葉忘れるなよ」
お巡りさんの一人が祖母の前にやってきて、
「御隠居さんは相変わらずお達者で結構でございますなあ。一度我々にもその毛利家の武道というもの教えて貰いたいもんですなあ」
「何をお云いやす、へもない泥棒じゃから簡単に済んだだけの事で、貴方達専門の方々にお教えできるようなもんではありませんよ」
余り解らない大人の言葉に退屈して、私はお光のお婆あにトイレに連れてもらい、すぐ又寝てしまった。
お婆様はそれから四十五日も家に逗留され、私は今様という昔の唄を幾度も祖母に習ったり、お婆様の子供時代の毛利家の御殿の話など聞いて感心したり、大変だったのだなあと驚いたりして、毎日朝が待たれるような日を過ごした。
沢山聞いたお話の中で今でも鮮明に耳に残り、昔がどんなに厳しい生活だったか、今の方がずっと楽だったと思ったことが、未だ忘れられずはっきり覚えている。二つほど今も心に残り続けるものを書いておこう。
祖母の家は毛利の次席家老というものであったらしく、一番心に残ることは次の様な話。

或日、祖母が庭に面した小部屋でお習字をしていると、突然庭でバシッという鋭い音が聞こえ、思わず立ち上がり障子を開けてみると、寅次といわれていた中間の首がコロリと庭の苔の上に転がり、父親が刀の抜身を右手に下げ「見るでない！」と怒声をあげたので祖母は驚き一計駆けて台所に行き、泣きながら母に縋りつくと、母親は優しく祖母の背を撫で「理助は打首にされたのであろう」といわれた。お婆様は打たれたのが理助か正衛門か見分ける暇もなく駆け込んだので、母親への返事は出来なかったとの事である。後々の話であるが理助という中間は父の気に入りだったが、幾度も金銭を誤魔化し、その上女中を手当り次第孕ませる悪党だったので、祖母の父の勘気に觸れ、打ち首にされたとの事だった。
何故幼い私がそんな話を知っているのか？と人は不思議に思うだろうが、祖母がいきなりそのような荒っぽい話をする筈もなく、実は泥棒が入った日の翌日の夕方、私は祖母と二人でお風呂に入り、何時もやるように濡れ手拭いの端をもって、水を取る為に力一杯振り下ろしたその音が、祖母に幼いころの手打ちの音を思い出させた事を知り、私はもう二度と、手拭いの端をもって水気を取ることは、止めようと決心したもの

だった。
「お祖母様は何処へ行かれたの」
私に優しかった祖母を思い出し、お光に尋ねる。
「へえ、嬢さんはご存知やおへんのやネ、ここからずっと西の方に、六条というとこがおましてな、そこには本願寺さんという大きなお寺がおますのでっせ、嬢さんのお爺さんはその大きなお寺の偉い和尚さんやったそうでっせ」
「この東福寺より大きいの？」
「そりゃ嬢さん何倍もおますえ」
「へえ、そんな大きなお寺にお婆様お帰りになるの」
「滅相もない、御隠居様はそのお寺の近くのシモタヤで、お一人で住んどいやすということでっせ」
「シモタヤって何？」
「こじんまりした家いうことでっせ」
「だったらお婆様お一人で淋しいのと違うの」
「そらお淋しうございますやろ、でもどうしても本願寺さんの傍から離れとうないというておっしゃいやしたでっせ」
「？？」

お光の話は私の想像をかきたてるけれど、余りはっきり解らない。
「嬢さん、今にもっと大きうおなりやしたら皆おわかりになりますさかい、もう一寸我慢おしやすや」
「はい」
私はあっさりあきらめて、おハツを貰い近所にいる同年の男の子の家へ、遊びに出かけた。
入江のケンチャンは、丁度私のところへ遊びに来る途中でうまく会えたので、手を握り合って二人共ピョンピョン飛んで喜んでいたら、東福寺を再建している大工のよっちゃんが、
「あんた達きれいな木の削ったもの、一杯残してあるからあれ繋いでいろんな遊びが出来るよ、欲しいだけ持って行き」
よっちゃんにいわれ、二人で抱えられるだけの広い大鋸屑を集めて、家へ持って行った。
「まあまあ嬢さん、迎山そんなもんどうおしやす、火の傍へ持ってきてはあきまへんで」
「はい、わかってる。私たちこれ体に巻いて縁側から飛び降りるの、そしたらファッとして天から飛んだみたいになるの」
「さいでおますか、小さい子達は何でもお遊びやすのなあ」

「僕一番縁側から飛び降りる」
ケンチャンが体中に一杯巻きつけて、
「さあ飛ぶよ」
といった。私も体に巻いてみたけれど、ガサガサしてとても飛降りなんて出来そうもない。
「私怖いからやーめた」
「何だ芙チャン、弱虫だナー」
「いいもん、怪我したらお祖母様心配されるから、ケンチャン矢張りこれ工事場へ帰しに行こう。ウン、だけどお婆様って、芙ちゃんちにそんな人いなかったけどなー」
私たちがお喋りしている間に何時の間にか、お婆様が縁側に出ておられて、
「そなたケンチャンという名前かえ、私が芙チャンの婆々様じゃ、これから幾度もここへ尋ねてくるから、よう覚えときなされよ」
「へー、でも僕ンチの婆チャンと比べると言葉がおかしいな、婆チャン遠いところから来たの？」
「そうじゃの、余り遠くはない、ほんの近く、六条から来ましたのじゃ」
「お婆チャンの言葉一寸おかしいよ」

「そうであろ、婆々様は山口という遠い所の生まれじゃから、京言葉には余り馴染まんのじゃ」
「ヤーイ、この婆チャン自分の事、婆々様いうてる僕とこの婆チャン、自分の事‘あて’いうよ」
「そうかいの日本も広いから、色々な言葉があるのじゃよ、自分の事を‘わたくし’というかと思えば、京言葉のように‘あて’とも、田舎ではわしともいう。まあ言葉というものは土地によって、色々あるということも坊ちゃんも芙さんも覚えときなされ、おわかりたか」
ケン坊は舌を出して、
「おわかりたようだ」というのが私は何と無く腹が立ち、
「ケン坊嫌い、もう遊ばないようだ、お婆様ってとても強くて、昨日の夜家へ来た泥棒なんかすぐペシャンコになって、お巡りさんに渡されたもーん」
するとケン坊は、一寸口惜しそうな目になって、
「お婆さんって何処でも強いようだ、僕とこのお婆さんでも大工の棟梁叱りつけてるよう」
「棟梁って、芙チャンわからへん」
「ヤーイ、芙チャン僕と同じ年なのに、棟梁知らんのって、芙チャン余

り賢くないよ」
私はとても腹が立ち、もう賢坊とは一生遊ばないでいようと、心に決める。
「まあまあ嬢さんと賢坊、そんなとこで口争いせんと、このおハツ持って仲ようおあがりやす。と、お光のお婆ぁが、小餅にうっすら醤油をつけ焼いたものと、餅を持ってきてくれた。所が今まで奥の間に座っていた、祖母の姿が何時の間にか消えている。私は瞬間、体がゾクーッとして、思わず大声で泣き出した。
「お兼のおばぁ、お婆様が消えてしまわれたあ、おばぁ探してきてえ」
私の声は子供と思えないほど、甲高く、台所では大変だったらしい。というのは祖母が私に黙って、六条へ帰るからと、台所に言い含めたらしいのを、敏感な私は察知できたので、それ以後は黙ってケン坊ンチへ遊びに行った。祖母はもうこの家にいないと思うと、体の何処かが何となく軽くなったように感じたのは、それなりに祖母の存在が、重圧だったのだろう。
その日は、母や姉や兄も女中たちも、何となくホッとした空気で、私は早くから母の傍で寝入ったとのことだった。

二、環境の変化＝十四人家族

祖母が六条へ帰ってから、怖い者無しとなった兄は、すっかり学校に行かなくなり、終日近くの山とか、醍醐の山辺りまで遠征して、遊び暮らすようになった。
母が毎日泣かんばかりに学校へ行かせようと、自分と一緒に出かけるよう説得しても、兄は頑として、登校を拒否し続けるばかりで、母に隠れてすぐ裏山へ消えてしまう。子供心にも母の心配が気になり、私も必死の思いで兄の姿を追い求め、裏山や東山連邦を、泣きながらついて歩いた。さすがに兄も私をほっておくことはせず、危ない所は手をひいたり、オンブしてくれたりで見放すことはなかった。私も少しずつ成長して、きっと兄には、学校へ行きたくないわけがあると、思うようになり、
「お兄チャン、どうして学校へ行けなくなったの」
と、執拗に尋ねずにおられない。
母親が学校から帰ると、それとなく兄の姿を追い求め涙ぐむ姿が、私には耐えられなくなっていた。
「ね、お兄チャンどうして学校へ行かないの」
私は間がな隙がな同じことをいうもので、流石にうるさくなったのか、

「どうして行かないのか、お前にだけ教えてやるよ」
といって話してくれた。それに依ると、兄は担任の先生に職員室へ行って、名簿を持ってくるようにいわれたのだが、どうしても先生ばかりのいる、その部屋へ行くのがイヤだったそうで「はい」と返事をしてそのまま家へ逃げ帰り、それ以来学校へ行けなくなった、とのことだった。
「でもお兄チャン、お母さん毎日泣いて、学校へ行こう」っていわれるのに、お母さん可哀そうだもん、その職員シツって、何か恐ろしいところなのお兄チャン、
「別に恐ろしくないけど、僕もう十日も休んでるし、絶対いけないヨ」
「でもお母さん、同じ学校へ行っておられるし、お兄チャン行かないとお母さん、校長先生って怖い先生に叱られるのだって、お姉さんいわれたよ」
「でも僕、職員室へはいれないよ。もう」
そういわれると、五才余りの私には、そのショクインシツという所が、とても恐ろしい所のように思えて、余り兄をなじるのも気の毒だと思って、それはそのまま気にならなくなった。
それから五日ほど経ったあるひ、私と兄が秀坊ンチから家に帰ったら、又お婆様が座敷に座っておられる。私は思わずぎくっとして、突っ立った

まま、ポカンとした。見たことのない大きな男の人が、祖母の前に座りニッコリ笑顔になって、
「芙美チャンダネ？」と言った。
「ハイ、でも私、小父さん知りません」
私はそういうなりお婆様の顔も見ず、その大きな男の人の後に廻り、頭や肩を両手で叩いた。
「これ！！何という行儀の悪い、許しませんぞ！」
という激しい祖母の叱責の声にもめげず、部屋を飛び出し、縁側にたっている兄の傍によると、思わず知らず大声になって、
「イヤダー、お兄チャンあの小父さんイヤダー、お兄チャン山連れてって、イヤダー」
私の甲高い声は家中に響き渡り、台所の婆あば等も慌てて駆けつけ、むずかる私を扱いかねていた。
泣くだけ泣き喚いた後は、多分又兄と一緒に通天橋を渡って、何処かへいったのだろう。
今になって思うと、それは私の体に流れる、実父の血の怒りであったのかもしれない様な、気がしている。
そこに座っていたのは、後に私達の養父となる人だったから、何も知ら

なくても私に流れる血が、母を取られると本能的に感知したのだろうと、思うようになったのは、それから七、八年経ってからだった。

三、それから後

母は登校拒否の兄の処遇に悩んだ揚げ句、祖母のすすめもあり、再婚したのだろうと思う。

私が会うなり、頭や肩を力一杯何とも解らない意志のようなものにそそのかされて、叩きまくった男の人達と、共同生活をするようになったのは、それから一年程後のことだった。

トラック三台に荷物や道具を積み込んで、京都市内からは少し離れた、畑や竹藪もあり、周囲には有名な寺院などもあちこちにある、閑散な場所に移ったのは、半年程後だった。

勿論、義父となった人には子供がいる訳だし、私達も三人姉兄妹だし、始めて会った時私もやっと七才となり、次の年には小学校へ行く年で、幾らかは大人たちの、苦慮もわかるようになっていた。

向こうには女姉妹が三人と、男子が一人で両方合わせると、男子二

人女子五人となる上に、行く先のないうちの婆や達を合せて、十四人の大家族である。周囲に余り家のない、どちらかといえば少し辺鄙な田舎が、かえって広々とした感じで、子供たちの遊ぶには好都合だった。

向こうの家にはお母さんが亡くなってお父さんだけ、こちらの家はお父さんが亡くなってお母さんだけという欠落家族同志は、どちらも欠けた人が満たされて雰囲気としては、そうチグハグな感じはしなかったのだろう。ただ問題は、私だったような気がする。私の脳裏にはどうしても、ピンと髭の立派だった父親の死顔が脳裏に残り、私に優しく接してくれる、義理の父に親しめない所があったが、この義父は私が本を読むのが好きな子だ、と思ったらしく、次々と子供向きの本を買ってくれた。同年の緑ちゃんという女の子は、ひたすら母の傍にくっついて、お母さんお母さんと寧日もなく、私は向うの上から二番目の、“まあさん”という、女学校へ通うお姉さんが大好きで、何でも教えて貰って、もう兄とお話もしなくなっていた。兄も既に中学生となり登校拒否もなく、順調な暮らしだったと思う。時には近所の小母さん達が、寄合所帯だなど陰口をいうこともあったらしいが、我が家の中は何時も、和気藹々としていた。

私達子供は大した抵抗もなく、義理の父や母をお父さん、お母さんと呼び合い、甘えたり時には叱られたりしながら、仲良く暮らしていた。

その裡、弟も二人生まれて遂に九人の子供と、二人の女中、両親と、時に私の祖母も訪れるので、多い時は私達に従いてきたお光のお婆、お兼の婆共々で、十五人の大家族の家となったが、大家族なりの秩序が出来て、大人たちは勿論、子供達にも夫々の秩序が出来て、各々夫々に自分たちの暮らしを、快く過ごすようになっていたが、十五人も一諸に暮らすということは、十五通りの生き方があるということだが、私達子供には毎日に様々な変化があり、例えば私と同年の緑チャンがそれまで、どれ程一諸に学校に行くよう誘っても、「一人で行く」と母の袖に縋り、ベソかいていたのが、元気良く「芙チャン早く行こう」と誘うようになったし、登校拒否の経歴をもっていた兄は、中学生になってから、すっかり快活になったばかりか、中一から抜群の運動能力を発揮し始め、体育の先生から何時か何処かで開催されるだろうオリンピックに「我が校から」と思わせるようになって、性格もすっかり快活となり、家中の人気者となっていた。

思い出に残る子供の頃の一番の楽しみは、お正月の間幾度も家中の子供達でやる、百人一首の歌留多会で小さい弟たちはさておき、私も緑ちゃんも一年生になると、二三枚のオハコという自分の好きな和歌を、兄や姉たちの持ち札でしっかり覚え、何処にあるか確認して、上の一句で何

処へでも遠征して、ものに出来た時の嬉しさと得意さは今も忘れられない。年上の姉や兄たちが、私や緑ちゃんに譲ってくれているのも知らず、二人ともすっかり有頂点になって、すっかり百人一首ッ子になって、読み手の父母にも誉められた。

七十年以上も昔のことなのに、目を閉じて思い出すと、その部屋の床の間の松竹梅なども、脳裏にしっかり映るようだ。

この盛大な大家族も、それから有為天変の数々があり、両親共々子供の成長に従い、又元通りに戻り、時世流れて七十年弱、生き残るものわずか三名、母方は私一人、父方は二人、一人は今や死の淵とか仄聞、げに人生とは斯の如く、儚きものにてありつるか。

（一九九九年筆）